

学位請求論文「安土桃山時代の書院造殿舎に関する研究」

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
地表圏システム学分野
中村 泰朗

論文目次

はじめに

第一章 安土城伝本丸御殿に関する考察

- 第一節 緒言
- 第二節 先行復元案の概要と問題点
- 第三節 遺構の検討
- 第四節 復元考察
- 第五節 伝本丸御殿の特質
- 第六節 結語

第二章 安土城天主の平面に関する考察

- 第一節 緒言
- 第二節 先行復元案の問題点
- 第三節 『信長公記』の異本と復元の方針
- 第四節 天主台上端平面の復元考察
- 第五節 各階平面の復元考察
- 第六節 住宅史上における安土城天主の特質
- 第七節 結語

第三章 中井家蔵「本丸指図」と豊臣大坂城本丸御殿に関する考察

- 第一節 緒言
- 第二節 「本丸指図」の概要と先行研究の問題点
- 第三節 諸殿舎の描写と塗り分け
- 第四節 極楽橋の検討
- 第五節 千畳敷の検討
- 第六節 「本丸指図」の制作年代
- 第七節 天正期の本丸御殿
- 第八節 結語

第四章 「京寿楽図」と聚楽第大広間に関する考察

- 第一節 緒言

- 第二節 聚楽第および「京寿楽図」の概要
- 第三節 「上洛日記」所収の聚楽第大広間指図
- 第四節 「上洛日記」所収図と「京寿楽図」の比較
- 第五節 フロイス『日本史』にみる聚楽第大広間
- 第六節 聚楽第大広間の室内構成
- 第七節 結語

第五章 三原城本丸御殿大広間に関する考察

- 第一節 緒言
- 第二節 三原城の沿革と復元史料
- 第三節 先行研究の問題点
- 第四節 創建当初の大広間の平面
- 第六節 大広間の建築年代と特質
- 第七節 結語

第六章 「輝元公上洛日記」所収指図に描かれる諸殿舎の考察

- 第一節 緒言
- 第二節 「上洛日記」の概要と指図の信頼性
- 第三節 七月二十八日条 聚楽第茶室指図
- 第四節 七月晦日条 京・豊臣秀長邸指図
- 第五節 八月二日条 京・豊臣秀次邸指図
- 第六節 九月五日条 大和郡山城指図
- 第七節 九月十日条 大坂・宇喜多秀家邸および足利義昭邸指図
- 第八節 結語

第七章 安土桃山時代の書院造殿舎の特質

- 第一節 平面規模の拡大
- 第二節 平面構成の変遷
- 第三節 上段の形式
- 第四節 殿舎の機能分化
- 第五節 安土桃山時代における書院造殿舎の変容

おわりに

内容の要約

安土桃山時代の書院造殿舎に関する先行研究を俯瞰すると、織田信長造営の安土城や羽柴（豊臣）秀吉造営の大坂城・聚楽第に存した諸殿舎など、重要な書院造殿舎についての実証的な検討をほぼ欠いていることが指摘できる。また同時代に建てられた最上層の邸宅

における書院造殿舎について、安土城伝本丸御殿・同城天主・豊臣大坂城本丸御殿・聚楽第大広間を除くと、その建築的構成を知り得るだけの史料は現在のところ皆無に等しい。

そのため先学による研究では同時代の書院造殿舎に関して、極めて限定的な史料のみを用いて論考が進められている。さらに使用した史料にしても厳密な史料批判を経たものではない。その結果として、同時代の書院造殿舎の変遷についてはそれぞれの先行研究で矛盾する箇所も多く見られ、議論の余地が多く残されている。

近年の文献史学分野による研究の進展により、安土桃山時代の中でも秀吉が天下を統治した時期には、彼を頂点とする身分秩序の再構築が進んだこと、それに伴い対面などの儀礼作法も変化したことが明らかにされている。そして大広間をはじめとする表向きに建てられた書院造殿舎は、対面をはじめとする儀礼を行うことを主目的としたため、儀礼作法の変化は書院造殿舎の平面構成にも大きく影響を与えたと考えられる。

つまり安土桃山時代は書院造殿舎の変遷を検討する上で一大転機であったと考えられ、この点からしても同時代の書院造殿舎の実証的な検討は、住宅史上における極めて重大な課題の一つと言えるのである。そこで本論では、同時代に造営された主要な書院造殿舎について、文献史料・絵画史料・考古学的遺構などを詳細に検討し、これらの建築的構成を復元的に明らかにする。そして主要諸殿舎の特質を踏まえた上で、同時代における書院造殿舎の変容過程を考察する。

まず第一章では安土城伝本丸御殿について、先行する復元案の誤りを指摘し、改めて遺構に厳密に基づいた復元考察を行った。その結果、伝本丸御殿の間取りは足利義政の東山殿常御所にも類似した古制を残したものであり、その周囲に幅一間の広縁を巡らすことで成立したと考えることが可能である。

また『信長公記』ならびにフロイス『日本史』の記述により、同城主郭部に存した諸殿舎の位置と機能の比定を行った。史料に現れる「御幸之御間」ならびに「御座敷」数室からなる御殿が現在の伝二の丸跡に位置して対面所の機能を、「南殿」が伝本丸跡に位置して常御所の機能を、「江雲寺御殿」が伝三の丸跡に位置して会所の機能を有していたと推察される。

第二章では安土城天主について、『信長公記』の異本の一つである「安土日記」ならびに現存する天主台遺構を検討し、後世の天守に普遍的に用いられている構造を加味した上で復元考察を行った。同城天主は一階と二階をほぼ同形同大の平面とし、身舎の周囲に幅二間の入側を巡らしたと考えられる。三階は身舎の規模こそ一・二階と等しくするものの、採光の問題を解決するために、身舎東西面に大型出窓もしくは幅一間の入側を設けた可能性が高い。四階は史料にあるように屋根裏階に相当し、五階は一辺を七尺間の一間半とした正八角形平面で、最上階すなわち六階は六尺間で三間四方の平面としたと考えられる。

同城天主は内部を書院造の部屋で造ったことが知られているが、一階の西側において室町時代の將軍邸にも通じる古式な平面構成を示す。その一方で同城天主には中世までの書院造殿舎には見られない新たな手法が用いられている。

第三章では羽柴秀吉造営の大坂城本丸を描いた中井家所蔵「本丸指図」について、その原図の制作年代の再検討を行った。まず図中の「御対面所」の平面構成は、大友宗麟の書状に示されている天正年間の対面所と全く異なるものである。また、その平面規模は秀吉が後年に造営した聚楽第大広間にも匹敵するものであり、さらに内部には梁間四間の部屋を内包する。そして秀吉の身分と政治的立場を踏まえれば、このように広大な殿舎が天正十二年当時に造営されたとは考えられない。

次に文献史料から考えると、図中の「御対面所」は慶長元年に造替された千畳敷に比定できる。そして諸殿舎の塗り分けからすると、原図が制作された際に城内の多くの殿舎に修復が加えられたことが分かる。加えて慶長元年より後の大坂城の来歴を考えると、原図の制作時期としては同年閏七月十三日に起きた慶長伏見大地震の後とするのが最も適当と言える。この他、外国人宣教師の記録ならびに大友宗麟の書状を検討すると、部分的ではあるものの、天正期の本丸御殿の姿を明らかにすることができる。

第四章では聚楽第大広間を描いたとされる岸上家伝書「京寿楽図」に史料批判を加えた。本図は当大広間を描いた「輝元公上洛日記」所収の指図と矩折りの上段、座敷面積といった点で一致し、さらにフロイス『日本史』より考案される当大広間と矛盾しないものである。また豊臣氏造営の諸建築や仙台北城本丸御殿大広間・瑞巖寺本堂と共通する細部の特徴を有している。これらのことからすると「京寿楽図」が聚楽第大広間の平面図である蓋然性は高いと評価できる。

当大広間の室内構成については、床高が「上壇」「中壇」「平座」の三段であったことを明らかにし、その形式が慶長度二条城二の丸御殿大広間、江戸城本丸御殿大広間に受け継がれていくことを示した。さらに室内意匠について、安土城「御幸之御間」・天主との比較、およびフロイス『日本史』などの記述から、柱や天井などの木部にまで金箔が用いられていた可能性が高いことを指摘した。

第五章では三原城本丸御殿大広間について、指図を中心とした諸史料に再検討を加え、本図に示されている平面がほぼ創建当初のままを伝えているとした。続いて三原小学校蔵の杉戸を検討して基準柱間寸法・柱寸法を明らかにし、当大広間の復元を行った。そして三原城の来歴および平面規模の広大さ・格式の高さから、その建築年代は小早川隆景が同城に隠居し死去するまでの文禄四年から慶長二年の間と推断した。

当大広間は三つの部屋列から構成される点など、基本的には聚楽第大広間をはじめとする通例に合わせておきながら、各部に特異な点が見られる。これは広島城天守・同城本丸御殿御広間など同時期の毛利氏造営の住宅系建築に共通する特徴である。また閉鎖的な納戸および「唐廐」については、室町時代末期の最上層の武家住宅の形式に通じており、大広間の平面形式や城郭内御殿の殿舎配置が確立する以前の古制を残したものとした。

第六章では「輝元公上洛日記」所収の各指図（聚楽第茶室、京・豊臣秀長邸、京・豊臣秀次邸、大和郡山城御殿表向き殿舎および御多屋、大坂・宇喜多秀家邸、大坂・足利義昭邸）について詳細に検討を加えた。これらの指図は当該殿舎の平面を示す目的で描かれた

ものではなく、単に日記の挿入図にすぎないため、一部に省略が見られる上に細部の描写に明らかな誤りも見られる。しかし図中の列席者の並びは蓋然性が高く、列席者間の余白を勘案することにより、当該殿舎の平面構成をある程度ではあるものの知ることができる。

第七章ではここまでに明らかにした主要諸殿舎の建築的特質を踏まえた上で、安土桃山時代における書院造殿舎の変容過程とその要因を検討した。まず平面構成について、天正年間後半に室町時代末期の主殿を拡大することで聚楽第大広間が登場した。当大広間を含む直線形配置の平面構成は、秀吉が行った対面の形式すなわち多くの列席者を二列に分けて座らせることに対応したものであり、そのために対面に使用する部屋列が長大なものとなった。また聚楽第大広間など直線形配置をもつ大型の書院造殿舎は、平面構成のみならず屋根形式も含めた上で、前時代の主殿を継承したことが指摘できる。

その一方で聚楽第大広間創建とほぼ同時期には、早くも矩折り形配置をもつ殿舎が登場した。この形式は対面などに訪れる人数が少ない、諸大名の邸宅に多く用いられたと考えられる。また天正年間頃までの書院造殿舎では各部屋の梁間は三間が最大であったのに対し、慶長年間になるとそれまでの通例を超える規模をもつ殿舎が登場する。その初例は慶長元年に造替された豊臣大坂城本丸御殿対面所であり、前身の対面所では天下人の儀礼用殿舎として手狭になったこと、加えて秀吉自身と豊臣政権の勢威を見せつける必要から、通例よりも大きな部屋を内包する殿舎を造営したと考えられる。

安土桃山時代における上段の使用法の特徴として、上段に尊者以外の人物が多く座ることが指摘できる。この方法は関ヶ原の戦いの後にもしばらくの間は行われていたと考えられ、元和二年に江戸幕府における諸儀礼の作法が定まった際に完全に行われなくなったと推察できる。この他に殿舎の機能分化について、文献史料によると慶長年間初頭には表向きに広間と書院を建てて御成の儀礼を進めていた。この構成は慶長元年の豊臣大坂城本丸を描いた「本丸指図」にも表れており、表・奥御殿ともに複数の儀礼用殿舎を建てていたことが知られる。

本論での考察の結果、安土桃山時代における書院造殿舎の変遷過程がはるかに明確なものとなった。織田信長造営の安土城では室町時代の將軍邸にも類似した、古式な平面構成の殿舎が造営されていた。ただし広縁の構成や上段を常設化した点などに近世に通じる新しい傾向を見出すことができる。また書院造殿舎の平面構成は天正年間後半から慶長年間初頭にかけて大きく変容しており、これは秀吉が天下を統治した時期に合致する。そして同時代に形づくられた書院造殿舎の構成が江戸時代へと継承されていくのである。